
母と子の絆

華月 彩

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

母と子の絆

【Nコード】

N5745Q

【作者名】

華月 彩

【あらすじ】

美形の神主が活躍する、ヒロイックホラーシリーズ第二弾！鎌倉周辺で多発する、連続幼女誘拐殺人事件。まともな目撃証言も得られず、捜査は難航していた。担当刑事の雲井辰馬は、藁にもすがる思いで、またも甥であり青龍神社の神主兼心霊相談を生業としている青龍堂司を尋ねた。折りよく被害者の母も霊障相談にやって来て、その話から司は、彼女の娘が念に囚われつつあると告げる。司は手遅れになる前に、少女の霊を救う事ができるのか？

梅雨時の雨の降り注ぐ中、その少女の亡骸は公園の雑木林の中に無造作に打ち捨てられていた。

朝になり、警察がその小さな亡骸にビニールシートをかぶせ、その周りに集まった。

その中には、神奈川県警の刑事である雲井辰馬くもいたつまの姿もあった。

警察官には珍しく、彼は長袖のＴシャツに防水加工したアウトドアジャケットと言う、いつもどおり非常にラフな服装で、スーツ姿の捜査員の中では一際目立った。伸びかけの短髪という髪形も、そのラフな服装には似合っており、三十五歳と言う年齢の割には若者らしく見える。

辰馬はゆっくりと青いビニールシートをめくると、被害者の顔を見て、やりきれない、と言うように首を振った。

被害者はまだ五歳ぐらいだろう。その身体には抵抗した時のものらしい無数の傷や泥がこびりついており、細い首には絞められたような赤黒い手形が、くつきりと残っていた。もう何も映さない瞳は、ぼんやりと開けられたまま、空を見つめている。

ゆっくりとビニールシートをかけながら、辰馬は身近にいた巡査に尋ねた。

「ガイシヤはまだ特定されていねえのか」

巡査は手にした手帳をぱらぱらとめくりながら答えた。

「被害者はこの近所に住む、館山さつきさん（五歳）かと思われま
す。昨晚、母親から娘がまだ帰ってこないと110番通報がありました。身元を確認してもらうまでははっきりした事は言えませんが」
辰馬は、そうか、と頭をかいた。

頭をかきながら、ふと甥の姿が頭をよぎった。

辰馬の甥である青龍堂司は、鎌倉市の青龍神社で神主をしているが、生まれつき霊力が強いので、心霊相談や除霊も生業にしている。辰馬も実際に司が除霊する姿を目にするまでは半信半疑だったが、一度それで助けられてからは彼の力は本物だと認めている。

—— あいつだったら、こんな事件の犯人も見つけられるんだろうか。

ぼんやりとそんな事を考えた。

犯人の検討は、辰馬にも予測はついていた。最近、この界隈を中心に多発している、幼女連続殺人事件の犯人と同一人物だろうと。その事件は辰馬も追っていたが、捜査は難航していた。

—— もし、あいつがガイシャの霊にでも聞けば、一発でわかるだろうに。

そんな同僚に鼻で笑われそんな事を考えて、思わず自分で自分がおかしくなった。

—— 馬鹿か、お前。そんな事で犯人がわかったからって、証拠がなきゃ何にもできねえよ。

でも、もし犯人の目星だけでもついてくれたら——。

そんな事をぼんやりと考えながら、降り注ぐ雨を見つめていた。

それから早一週間。犯人の目星は依然とついていない。

あれから進展があった事と言えば、被害者の身元がはっきりした事だけ。

被害者はあの時辰馬が捜査に聞いた通り、近所に住む少女・館山さつき本人であると確認された。

そして、検死の結果、被害者の爪から犯人のものとと思われる皮膚が検出され、その結果犯人はA型の、おそらくは男性であろうと検討がついた。

ただ、それだけだ。

証拠となる皮膚からDNA鑑定をしようにも、容疑者が特定できなければ何にもならない。

来る日も来る日も辰馬は聞き込み捜査に追われたが、ろくな目撃証言も得られず、八方塞の状態であった。

「はあ」

一通り聞き込み捜査を終え、辰馬はデスクの上で頭を抱えていた。このままじゃいけねえ。このままぐずぐずしていたら、また被害者が出る。

必死に考えようとする辰馬の脳裏に、また甥の姿が浮かんだ。

—— あいつなら、何か知ってるかもしれない。

辰馬は上着を手に取ると、

「ちよつと聞き込み言ってくる」と同僚につげ、職場を後にした。

二

辰馬は愛車のワインレッドのプリメーラに乗り込むと、青龍神社に向かい、車を走らせた。

大通りから横道に入り、何度か角を曲がると、青龍神社のシンボルとも言える、見事な桜並木があった。もっとも今の季節は葉桜となっているが。

—— 今の時間なら、社務所にいるだろうな。

仕事で外出していなければ良いんだが、と思いながら、辰馬は神社へと続く石畳の手前で左に折れ、神社の裏手に車を止めた。

神社の裏手にある小さな駐車場には、司の愛車であるシルバーのビッツが一台だけ止まっている。元来エコロジストである彼は、いわゆるエコ・カーしか乗ろうとしない。

駐車場を挟んだ神社の向かいには、見事な平屋建ての一軒家——青龍堂家——があるが、今日はそちらには眼もくれず、駐車場の脇の坂道を上がった。

坂道を上がると社務所の横に出る。

社務所の前に来ると、辰馬は呼び鈴も押さずにいきなり玄関を開けた。

がらんとした室内。玄関を見ても客の気配はない。

「司ー。いるかー？」

声をかけてみると、奥から「はい」と澄んだ声がして、着流し姿の背の高い青年が現れた。

真ん中で分けた前髪の下の形の良い眉と言い、すっと通った鼻筋と言い、東洋的なかなり整った顔立ちだが、その眉の下の切れ長の瞳は、日本人には珍しい深い緑色だ。

青年は、辰馬の姿を認めると、にっこりと微笑んだ。

「ああ、叔父さん。どうしました？とりあえず奥へお入りください」
上品な物腰で辰馬を奥へといざなった。

社務所内の居間——と言っのだろうか。勧められるままに座布団に座り、お茶を淹れに行く甥の後姿に話しかけた。

「悪いな。いきなり押しかけちゃって」

辰馬が言つと、形の良い手をひらひらとさせて司は言った。

「いえいえ。珍しいですね。叔父さんが私のところに突然いらつしやるなんて」

「ああ、ちよつな——。今日、音輝おとは？いねえのか？」

「ええ、今日はお友達のところ遊びに行つてるんですよ」

そうか——と辰馬は内心ちよつとほつとした。音輝と言つのは今年小学校に上がったばかりの司の年の離れた妹で、父親の顔を知らずに育つたせいか、筋金入りの兄貴っ子なのだ。

以前仕事の依頼でここに来た時は、お気に入り兄と遊んでいるところを邪魔されたのがよほど気に入らなかったのか、挨拶もせず就走って行ってしまった。今日は音輝のふくれつつらを見ずにすんだと言っ点で良かったと言える。

日本茶を辰馬と自分の前に置くと、司は辰馬の向かいに姿勢良く座った。

対照的に、辰馬は日本茶をぐびりとやりながら、面倒くさそうに頬杖をついて、切り出した。

「いや——何だな。今ちよつと抱えてる事件で捜査が難航しててよ」

「——幼女連続殺人事件の事ですか」

こちらがまだ何も言っていないのに、この聡明な甥はなかなか鋭い。

辰馬は頬杖をついたまま、にやりと笑った。

「察しが良いな。俺はずっとこの事件の捜査をしてるんだが、これが有力な目撃情報もなし、ガイシャにも鎌倉周辺に住んでいる幼女って事以外、全く共通点はなし、と来たもんだ。おかげで未だに容疑者すら全く上がってこねえ」

辰馬はおどけたように両手を広げて、お手上げ、のポーズをしてみせた。

司は、なるほど、と相槌を打ちながら、静かにこつちの話を聞いている。

辰馬はちよつと迷いながら、本題に入った。

「おめえ——何だ、靈感あるんだろ？」

その言葉に司はちよつと面食らったような顔をした。

「ええ、まあ……そういう仕事してますからね」

「それってつまり、死んだ人間の声とかも聞けるのか？」

「まあ、そうですね」

「つまり、殺された被害者から犯人を聞きだす事も可能なわけか？」

その言葉でようやく合点がいったらしい。司は左手の人差し指を唇にあて、ちよつと考えるような顔をして、言った。

「まあ、被害者の靈魂がまだこの世にとどまっていれば、できない事はありませんが——」

その言葉に、辰馬はにっこり笑って膝を打った。

「それだ！お前、ガイシャの靈に話を聞いてくれねえか？」

「……つまり、そこまで捜査は難航しているわけですか？」

その言葉に辰馬はうっと言葉に詰まって、がっくりと肩を落とした。

「・・・まあ、そうだ」

司はやれやれ、と言うように両手を組んでため息をつくと言った。

「わかりました。うちの音輝も同じぐらいですから、他人事とは思えません。できる限り協力はしましょう」

その言葉に、辰馬の顔がぱつと輝いた。

「とりあえず、被害者の写真を見せていただけますか？」

辰馬はバッグから数枚の少女の写真を取り出した。

「今のところ四人殺られてる。一番新しいのは、この館山さつきだ」

司は辰馬が指差した写真を手に取ると、静かに目を閉じた。

やがて、少し苦しそうに眉をしかめて、語り始めた。

「——かなり激しい恐怖を感じますね——。恐らくよほど恐ろしかったでしょう。記憶がかなり混乱している。彼女の魂は、今ちよつとこの世ではない場所にありますね」

その言葉に辰馬は落胆して口を挟みかけたが、司の言葉が遮った。
「——殺害された後、彼女は本能的に自宅に帰ったようです。そこで気配が途切れています」

「なんとかならないのか？」

「ちよつと待ってください」

司はもう一度目を閉じた。

「ここは——ああ、うちの前ですね。今こちらへ向かっている」
「ガイシャの霊が？」

司はゆつくりと目を開いて言った。

「いえ、彼女のお母様の方です。何か私に相談があるようです」

その時、呼び鈴の音が鳴った。

「ちよつと叔父さんはここで待っていてください」

司はそう言つと、つと立ち上がり、玄関に向かった。

呼び鈴に応じて玄関に出ると、司と同じかせいぜい二十代後半と思われる、小柄な女性が立っていた。長い髪をふわりと波打たせて

いて、人形のような風情の女性である。

女性は、司の姿を見ると、少し驚いたような顔をしたが、

「あの——。心霊相談ってここで大丈夫ですか？」と言った。

司はにっこりと微笑むと、

「そうですよ。娘さんの件でいらっしゃったのですよね？今ちょうど捜査員の刑事さんもいらしてます。どうぞ中にお入りください」
そう言うのと、上品な物腰で女性を中へといざなった。

三

「突然お伺いして申し訳ありません」

日本茶が出され、司が目の前に腰掛けるなり、女性は言った。

司はその言葉ににっこりと微笑んだ。

「いえ、大丈夫ですよ。ああ、彼は私の叔父で神奈川県警の雲井辰馬さん。娘さんの事件を担当してます。同席しても構いませんか？」

女性は微かに「はい」と答え、隣に座る辰馬に軽く会釈すると、司を不思議そうに見つめた。

「あの——なぜ私が被害者の母であるとわかったのですか？まだ何も言っていないのに——」

司はテーブルの上に広げられた、被害者の写真に目をやって、言った。

「ああ、今ちょうど叔父に頼まれて、館山さつきさんの写真を霊視していたのです。そうしたら、あなたがこちらにいらっしゃるのが見えましてね」

女性はますます不思議そうな顔で司を見つめる。

「ああ、申し遅れました。私は青龍堂司と申します。この青龍神社で宮司をしております」

そう言うのと、礼儀正しく頭を下げた。

女性も慌ててお辞儀を返した。

「私こそ——自己紹介もまだで失礼いたしました。私は館山みど

りと申します」

そうして、気分を静めるように、出されたお茶を一口飲んで、ぽつりと語り始めた。

「知人から、こちらの神社でお祓いや心霊相談をやっていたらしゃると聞いて、参りました」

またお茶を一口飲んで、続ける。

「ご存知かと思いますが、私の娘である館山さつきは、一週間前に殺されました。犯人はまだ捕まっていません」

そう言うとうつと言葉に詰まって涙ぐんでしまった。

司はそういう状況に慣れているのか、優しく声をかける。

「お気持ち、お察しいたします。この度はご愁傷様でした」

みどりは慌てて手にしたハンカチで涙を拭くと、ごめんなさい、と呟いた。

「実は——さつきが死んでから、私の家で不思議な事が起こり始めたのです」

そう言うとうつとぽつりと語り始めた。

「さつきが死んだ後、私は張り詰めていたものがぷつんと切れてしまったようで、一日中何をする気力もなく、ぼんやりとした日々を送っていました」

司は何も言わず、静かに見つめている。

「たまにテレビをつけても、あの子のニュースが流れてばかりで、もうテレビをつけるのも辛くて——」

そこまで言うとうつと、当時の気持ちを思い出したのか、声を殺して泣き出してしまった。

やがて、涙を拭くと、また、ごめんなさい、と言って続けた。

「異変は昨日の晩突然起こりました。事件当時はなかなか夜も眠れなかったのですが、数日経って疲れが出たんでしょうか。その日は倒れこむように眠りについて——あの子が夢の中に出てきたのです」

そこまで言うとうつと、当時の記憶を呼び覚ますように、またお茶を一

口飲んだ。

「さつきは夢の中で、大勢の黒い影に囲まれて、助けを求めています。ここは怖い、お母さん助けて——」って。私はその声に必死で手を差し伸べようと思いますが、なぜか身体が動かず、そこで目が覚めたのです」

みどりはその時の様子を思い出したのか、手にしたハンカチをぎゅっと握り締めた。

「私は矢も盾もたまらなくなつて、あの子の部屋に行つたんです。すると、鍵をかけたわけでもないのに、ドアノブがびくとも動かなくて、しかも、何とも言えない嫌な——気配と言うのでしょうか——を中にも感じました。私は靈感など全くないのですが、さつき夢見たことと合わせてどうにも胸騒ぎがして、知人に相談したところ、こちらをご紹介いただいて、連絡もせずに飛んできた次第です」

やっとそこまで語り終えると、またハンカチで涙をおさえて、頭を下げた。

司は、わかりました、と頷き、言った。

「恐らく、娘さんの魂は、今ご自宅に囚われているでしょう。しかもあまり良い状態ではない——。彼女の恐怖心が呼び寄せた、念に支配されようとしていると思われます」

「念——って何ですか」みどりが怪訝そうな顔で聞いた。

「念と言うのは、感情を失った、言わば負のエネルギー体です。強い恨みを持つて死んだ靈魂や怨念は、やがて感情を無くし、物事を悪い方へ、悪い方へと運ぶエネルギー体へと変化します。そうなる」と成仏はもはや不可能。神剣をもって祓うしか方法はありません」

司はそう言うтусつと立ち上がった。

「とにかく急いだ方が良いでしょう。支度してきますので、ちょっとこちらでお待ちください」

そう言つて部屋を出て行った。

「やっぱりお前そのカッコなのな」

辰馬が戻ってきた司の格好を見て、あきれたように言った。

「え？何がですか？」

当の司は全くそれに気づいていないようだったが、依頼主である館山みどりでさえも目を丸くしている。

それもそのはず。戻ってきた司の格好は、先程の着物の下に灰色の馬乗り袴という出で立ちであった。おまけに黒い手提げ鞆の他に神剣が入っている黒い細長いバッグまで背負っていて、まるでお侍のようだ。

辰馬はもう何も言うまい、と思って手をひらひらとさせた。

「いや、何でもねえ。早く行こうぜ」

そう言つと、三人は駐車場へと急いだ。

シルバーのビツツに乗り込むと、司は履いていた草履を運転席に置いてある靴に履き替えた。

その様子を後部座席から見、辰馬が言った。

「ほう。ちゃんと法律守ってんのか。感心感心」

司はちよつとむつとした顔をして、

「当たり前ですよ。このまま運転したら道路交通法違反ですから」と言った。

そんなめんどくさい事するなら、洋服で運転すれば良いのに——
——と言っ言葉が出かかったが、それを言つとまた話がこじれそうなので、すんでのところで飲み込んだ。

「では、参りましょう。館山さん、道案内をお願いします」

司は助手席に腰掛けたみどりに話しかけ、車を発進させた。

少し車を走らせたところで、館山みどりが少し遠慮がちに声をかけた。

「あの——青龍堂さん」

「何ですか？」司は前を向いたままそれに答える。

「青龍堂さんは、ハーフなのですか？」

司は何の事かと一瞬迷ったようだったが、すぐに自分の瞳の事を言っているのだと察して、微笑んだ。

「いえ、私の家は純粋な日本人ですよ。ただ、私の家系で時折こういう瞳を持つ者が生まれるそうです」

みどりはその言葉に、ならどうして——と口を開きかけたが、それよりも早く司がその疑問に答えた。

「昔、私の先祖で、龍神が人間の女性と交わり、子を成したという伝説がありましたね」

司はゆるやかにハンドルを操りながら、続けた。

「その少年は私と同じく緑の瞳を持って生まれてきて、不思議な力を持っていたそうです。その力を用いて都を荒らしていた鬼を封じ、最後の封印の仕上げとして、青龍が棲んだと言われる都の東であるここ鎌倉に移り住んだと言うのです。それが青龍神社の始まりであると」

みどりは不思議な話に、ただただ目を丸くして聞き入った。

司はその姿を横目でちらと見ると、少し冗談っぽく微笑んだ。

「ですから、私の身体のなかにも、わずかながら龍神の血が流れているのかも知れません。ただ、私の家系で緑の瞳を持つ人間は生まれながらにして霊力が強いそうで、その神剣を扱えるのも、その人間だけだと言う事です」

おそらく常人には信じがたい話だろうが、司の不思議な瞳の色に妙な説得力があったのかも知れない。みどりは感心したように、ほうつと息を吐いた。

やがてみどりが少し指示を出すと、静かな住宅街に出た。

「その、赤い屋根の一軒家が私の家です」

ガレージには主人のものらしい車が止まっていたので、みどりの指示のもと、玄関の前に車を止めさせてもらった。

「今日は平日ですから、主人は仕事でおりません。どうぞ」

みどりは玄関を開けて客を通すと、慣れた手つきでスリッパを勧めた。

司は、このままで結構です、とやんわりと断り、足袋のままで中に入った。

辰馬はいくら地元の神主とは言え、霊能者と言う怪しげな人間、しかも男を軽々しく家に上げる事に少し疑問を感じたが、警察官である自分も同行している事だし、と納得する事にした。第一、ここでご主人まで出て来られては、色々と面倒な事になりそうだ。

「さつきさんの部屋を見せてください」

司の言葉に、みどりは二階へと二人を案内した。

二階の突き当たりの部屋の前で立ち止まると、みどりは言った。

「ここがさつきの部屋です」

司は神剣を袋から出し、腰に差すと、緊張した面持ちでドアノブを握った。

ぞわり。

なんとも言えない、嫌な気が、ドアノブを握った手に触れた。

司はドアノブから手を離すと、二人に言った。

「おそらく、この向こうは異空間に通じているようです。さつきさんの霊が呼び寄せてしまった念が、異空間への扉を開いてしまったのでしょうか」

「なんとか——ならないのですか？」みどりがすがるような目で尋ねる。

司はみどりの目を真っ直ぐに見つめると、安心させるように言った。

「大丈夫です。さつきさんの霊はまだ念に取り込まれてはいない——とは言え、急がなくてはなりません。私が扉を開けて中に入りますから、お二人はここで待っていて下さい」

「いえ、私も行きます。娘が私に助けを求めているのに、行かないわけにいきません」

それまで、悲しみのせいか頼りない様子だったみどりが、初めて強い意思を見せた。

その言葉に、辰馬も続いた。

「俺も行くぜ。この事件の担当の刑事だからな」

司は二人の態度に、あきらめたように言った。

「――仕方ありませんね」

そしてバッグから不思議な文字が書かれた札を二枚出すと、辰馬とみどりに一枚ずつ渡した。

「それは魔よけの護符です。肌身離さず持っていてください。ここから先は何が起こるかわかりません。二人とも私の後を離れないようにしてください」

二人が頷いたのを見届けると、よろしい、と言うように頷いて、ずっと片手を扉にかざし、呪を唱え始めた。

「天魔外道皆仏性 四魔三障成道来――」

長い、不思議な呪が終わると、それまでかたくなに閉ざされていた扉が、ぱつと内側に大きく開いた。

中には、子供部屋とは全く思えないような、暗くゆがんだ空気が立ち込めていた。

「二人とも私の後を離れないようにしてください」

司はそう言う、中に足を踏み入れた。

二人も意を決して中に続いた。

三人が中に入ると、背後で扉が勢い良く閉まる音がした。

辰馬がその音に振り返ると、今入ってきたばかりの扉が、影も形もなくなっていた。

「扉が――」

辰馬が言つと、司がちよつとそちらに目をやって、言った。

「大丈夫です。念を抜つて、空間が元に戻れば出られます。急ぎましょう」

部屋の中は、黒と紫が混じったような、何とも言えない嫌な霧のようなもので満ちており、どこが上でどこが下かもわからない。とりあえず、歩けると言う事で、そこに床がある事がわかるくらいだ。どこがこの空間の果てなのかさえもわからない。

司は迷わぬ足取りで前を進んでいくが、正直辰馬とみどりは心細かった。

突然、びゅつと黒い影が三人めがけて飛んできた。

みどりが悲鳴を上げ、辰馬は思わず身構えたが、司は動じる事なく、片手をその影にかざすと、短く呪いを唱えた。

影は悲鳴を上げて霧散した。

「たいしたものではありません。念と一緒に呼び寄せられた、小さな妖魔です」

司は事もなげにそう言うと、またすたと先を急いだ。

辰馬とみどりは慌ててその後に続いた。

辰馬はその背中に呼びかけた。

「おい、司！」

司は歩を進めたまま、ちらとも後ろを振り向かずに答えた。

「何でしょうか？」

そう言うときまた前を向いて歩を進める。

辰馬がその背中に食いついた。

「お前、さっきから自信ありげにすたすた歩いてっけど、ちゃんとどこに何があるかわかって歩いてるんだろっな!？」

司はなおも歩を進めつつ、言った。

「大丈夫です。この先に大きな念が巣食っている気配がします。さつきさんがいるのはそこです」

それからどれくらい歩いただろうか。

そもそも子供部屋はこんなに広がったか？

いや、そもそもここは異空間なのだから、広さが変わっていても不思議はない。

辰馬はそう自問自答しながら、歩き続けた。

時折現れる妖魔を司が抜いながら、三人は歩を進めた。

突然、司が立ち止まったので、辰馬はその背中にぶつかりそうになった。

「おい、お前、いきなり立ち止まるなよ！」

思わず口から文句が出たが、目の前に突如にゆっと黒い巨大な腕が伸びてくるのを目にした途端、息を呑んだ。

辰馬は司のように靈感があるわけではない。

だが、それが近づくとやばいものである事は、本能で理解できた。みどりが、小さく悲鳴を上げる。

しかし、それが三人の目の前に届くよりも早く、司は青龍刀の鯉口を切っていた。

その途端、雷のような衝撃と共に、光の柱が彼の全身を包み込み、巨大な黒い腕はそれを恐れるかのようにひるんだ。

それは、彼の身体に龍神が乗り移る姿だったのだろうか。

吸い込まれるように消えた光の柱の後に残された者は、いつものおっとりとした青年ではなかった。

端正な姿である事は変わらない。

だがしかし、その姿は美しいが氷のように冷たく、それでありながら目を離さずにはいられない、何とも言えない魅力があった。

女性のように美しく、男性のように力強い。

ただただ美しく、神々しいものがそこにあった。

それは、静かに鞘から刀を抜き払い、構えた。

司の変化と同時に、目の前の黒い気の塊は、次第に全貌をあらわにしていた。

それは、いつか霧の中で見たような、黒いどろどろとした気の塊であった。

特によそ見をしていたわけでもないのに、辰馬はそれがそれまでそこにあるのがわからなかった。

司は、気の塊から目を離さずに、二人に言った。

「館山さん、叔父さん、先程渡した護符は持っていますね」

その声さえも、いつもとは違う、遠くから響いてくるような声である。

二人は半ば呆然として、頷いた。

司はその様子を見届けると、よろしい、と言うように頷いて、前を見据えたまま、言った。

「二人ともそこを絶対に動かないで下さい」

司は、黒い塊に向かい、迷わぬ足取りで向かって行く。

まず、最初に攻撃を仕掛けてきた、黒い巨大な腕が、思い出したかのように攻撃を開始した。

司を押しつぶそうとするかのように、真上から司めがけて迫ってくる。

しかし、それが自分を押しつぶすよりも早く、司はそれを横っ飛びに避けていた。

黒い腕は獲物を見失い、司がいた地面へと突き刺さった。

司はそれを躊躇なく切り裂いた。

黒い腕が悲鳴を上げて霧散する。

黒い塊は、それを認めると、どうやら敵と判断したらしく、内部から無数の黒い触手が司めがけて襲い掛かってきた。

それはあつという間に司を取り囲んだかと思われたが、すぐに切り裂かれた。

触手が悲鳴を上げて霧散した。

しかし、休む間もなく、触手が前後左右から司を襲う。しかし、それが司まで届く事はなかった。

司は、目にも留まらぬ速さで触手を切り払い、更に真上から伸びてきた触手を飛んで避けていた。

さらに、司をつかみそこなって地面に突き刺さった触手を切り払う。

その度に触手は悲鳴を上げて霧散し、無数にあつたかに見えたその触手は徐々に数を減らしていった。

しかし、このままではきりがない。

ぐずぐずしていると、さつきの霊が完全に念に支配されてしまう。

そう思った司は、己の靈感を研ぎ澄ませた。

霊を見る事ができる、深緑の瞳を、黒い塊に向けて凝らした。

すると、わずかではあるが、右胸に当たる部分にぼんやりと光る核のようなものがあるのが見えた。

司はきつと目を開くと、黒い塊の懷に飛び込み、その右胸に青龍刀を突き立てた。

——途端。

黒い塊は悲鳴を上げ、爆発霧散した。

七

司は念を完全に抜つたのを見届けると、刀を鞘に納めた。

その途端、彼を取り囲んでいた不思議な光は消え、いつものおつとりとした青年の顔に戻った。

跡形もなくなった黒い塊の後に、小さな少女が、うずくまって泣いていた。

その姿は儚げで、少し背景が透けて見えた。

「さつき！」

みどりが叫んだ。

少女、いや、さつきの霊は、立ち上がり、お母さん、と呼び、母親に駆け寄った——声は聞こえなかったが。

さつきの霊は、嬉しそうに母親にまつわりついて笑った。みどりも、実体はないものの、娘の霊をいとおしげに抱きしめた。そのしぐさは、娘の霊体を壊さないように、やさしく気遣っているように見えた。

司は、さつきの霊の傍らにひざまずくと、やさしく話しかけた。

「さつきちゃん」

さつきの霊は、母親にしがみついたまま振り向いた。

司を不思議そうに見つめている。

司はそのあどけない目をやさしく見つめて微笑むと、一つ一つ言葉を選ぶように話しかけた。

「君は思い出したいくないと思うけど、すごく大事な事だから思い出して欲しいんだ」

さつきの霊は、不思議そうに首をかしげる。

「君がもう、身体がないのはわかるよね？」

さつきの霊は、言われて自分の右手を見つめたが、向こう側の景色が透けて見えているのに驚いた顔をした。

司は、幼くして死んだ少女に少しでも辛い思いをさせまいと、ゆっくりと話しかけた。

「信じたくないだろうけど、君はもう死んだんだよ。この世にいやいけないんだ」

この言葉を言う時、さすがに司は少し辛そうな顔をした。

さつきの霊は、自分が死んだ時を思い出したのか、その目に恐怖の色が広がった。

司は、母親にしがみついていたがたと震えるさつきの霊の、短く切りそろえた髪にやさしく触れた。

「大丈夫。怖がらないで。もう君を誰も酷い目にあわせたりしない

——。ただ、私たちは君をこんな目に遭わせた犯人を見つけないんだ」

さつきの霊は、うるんだ瞳を司に向けた。

「思い出して——君を殺した犯人は誰なのか。どんな人だったのか」

司はそう言うと、静かに目を閉じた。

さつきの霊は一言も発しなかった。

だが、司には何か感じられたらしい。

やがて、そうか、と頷いて目を開くと、言った。

「教えてくれてありがとう」

そう言うと、立ち上がり、何事か呪を唱えた。

すると、それまで出口のなかった空間に、ぽつかりと一筋の光の道が浮かんだ。

司はさつきの霊に手を差し伸べると、やさしく言った。

「さあ、君はもうあちらへ行かなければ」

少女の霊は、いやいやをするように母親にしがみついた。

司はなお手を差し伸べて、言った。

「君はもうここにはいけないんだよ。いつ、自分が死んだときの恐怖心に襲われるかわからない。そうすると、また悪いものを呼び寄せてしまうから」

なおも母親にしがみつく少女に、安心させるように言った。

「心配しなくても、お母さんとはまた会えるよ。それまで、向こうで待っておいで」

少女は少し悲しそうな顔をしたが、やっと母親から離れると、司の手を取った。

司はさつきの霊を道の入り口まで連れて行き、

「この道を真っ直ぐ行きなさい」と言った。

さつきの霊は名残惜しそうに母親の方を振り返ると、小さく手を振り、光の道を駆け出した。

その姿が、小さく、見えなくなり、やがて光の道は消えた。

それと同時に、部屋の空間も元の子供部屋に戻った。

あんなに歩いたと言うのに、三人ともそう広くない子供部屋の真ん中にいた。

「もう大丈夫ですよ。外に出られます」

まだ呆然としている二人に司がそう言った。

辰馬が半信半疑でドアノブをひねると、さつきまでびくともしなかった扉が、いとも簡単に開いた。

「青龍堂さん、さつきは——」みどりが司にすぐるようにして尋ねた。

司は安心させるように答えた。

「さつきさんの霊は、行くべき所に行きましたよ。もう大丈夫です」みどりはほつとすると同時に、もう娘が本当に去ってしまったのだと言う事を知り、悲しそうな顔で俯いた。

司は、そんなみどりを安心させるように言った。

「心配しないでください。さつきさんは、この世の向こう側であなた方を待っています。これからずっと、あなた方を見守っていますよ」

その言葉に、みどりは目頭を押さえて、頷いた。

八

全てが終わり、みどりは二人にお茶を飲んでいくように言い、二人はお言葉に甘える事にした。

司はみどりに紙とペンを借りると、みどりがお茶を淹れに行っている間に、紙にさらさらと似顔絵のようなものを書き始めた。この甥は、字も上手だが、絵も上手い。

書き終えると、紙を辰馬に渡した。

「叔父さん、この男を搜してください。犯行当時の服装はラフなチエックのシャツにゆつたりとしたパンツ。まだ若い、大学生ぐらいの男です」

「わかった。この付近に住んでいる男だよな？」

司はちよつと考え込むように右手の人差し指を唇に当てた。

「さつきちゃんが見た限りの情報ですから、どこに住んでいるのかまではわかりませんが――ああ、そう。レザーの紐のペンダントを首から下げてました。こんな金属の三角のプレート飾りがついていて、横文字が書いてあります。それからその下に小さな数字――ですね。36で始まる四桁の数字です。手がかりになるかわかりませんが」

司はそう言つと、似顔絵の横に少し膨らんだ三角形のペンダントヘッドと、ご丁寧にもそれに書かれていたらしい文字まで書いた。職業柄見慣れているのだろうが、短い間で良くそこまで見ていたものだ。

辰馬は「サンキュー。助かった」と言つて、礼を言うように司が渡した紙を掲げた。

司は「どういたしまして」と言った。

ちようどその時、紅茶が目の前に出されたので、二人とも礼を言つて飲んだ。みどりも空いた椅子に腰掛け、自分の紅茶を飲む。

紅茶を飲むと、少し気分が落ち着いたのか、みどりは長いため息をついて、尋ねた。

「あの、青龍堂さん」

「何ですか？」

「あの、さつきは自分が殺された後、何が起ったのでしょうか？なぜ、あんな恐ろしいものに囲まれなければならなかったんですか？」

司はカップを置くと、ちよつと考えながら言った。

「さつきさんはおそらく、最初は自分が死んだ事にも気づいてなかったと思いますよ」

みどりがその言葉に、怪訝そうな顔を向ける。

「さつきさんは自分が殺された後も、いつも通りこの家に帰ってきた。でも、なぜか皆自分の方を見ないし、様子がおかしい。そんな時に、たまたま自分の事件が報道されているテレビ番組を見てしま

った」

その言葉に、みどりがあつと声を上げる。

「そのテレビを見て、彼女は、自分が殺された時の恐怖をまざまざと思い出してしまった——まさに、殺された時の恐怖心をそのまま思い出してしまったんです」

「で、自分の部屋に閉じこもっちまったわけか」

辰馬が納得したように腕を組み椅子にもたれかかった。

司は、その言葉に頷くと、続けた。

「そう。そして、あまりの彼女の恐怖心に、念や妖魔等、色々なものが呼び寄せられてしまったんです。念は元は恨みを残して死んだ者の怨念ですから、同類の匂いを嗅ぎ分けて、寄ってきたのでしょう。そして、あまり色々な悪いものが呼び寄せられてしまったので、空間にひずみが生じてしまったんです」

「あの夢は——」

みどりの言葉に、司は応じた。

「よほど強い霊でないと、人前に姿を現すのは難しいんです。さつきお二人がさつきさんの霊を見る事ができたのも、私と一緒にいたからです。ですので、そういった霊は、近しい人の夢に現れてメッセージを伝えたりするのですよ」

そう言つと、司はみどりを見て、微笑んだ。

「さつきさんは生前、お母さんの事が好きだったんでしょうね。だから、母親であるみどりさんの夢枕に立ったのだと思いますよ。きつと、お母さんなら自分を助けてくれる、と言う事がわかっていたのでしょうね」

その言葉に、みどりはまた瞳をうるませたが、その口元は微かに微笑っていた。

数日後、辰馬は再び青龍堂家を訪れた。

今日は神社ではなく、自宅にいらつたので、久しぶりに見事な平屋建ての屋敷に足を踏み入れた。

司の母の美月が玄関先で出迎えてくれた。

この姉は、もう四十代前半なのだが、司に似た瓜実顔の日本的な美人で、とても司のような息子がいるようには見えない。司と並ぶと、親子と言うよりも姉弟に見えてしまうくらいだ。

司がいつも和服ばかり着ているのは、おそらく母親の影響だろう。梅雨の晴れ間で、今日は少し暑いぐらいの気温だと言うのに、彼女はいつもどおりきちんと着物を着こなしていた。しかも、それでいて汗一つかいていない。

「姉さん、そんな格好で暑くねえのか？」

半袖のＴシャツ姿の辰馬が思わず尋ねると、美月は微笑って、「洋服と同じで、暑いときは薄物を着るから大丈夫なのよ」と言った。

司の部屋の前まで案内されると、中から少女の笑い声がした。まさか、と思って扉を開けると、相も変わらず着流し姿の司が、音輝にまつわりつかれていた。

司は辰馬の顔を見ると、困った、と言う顔をして、

「今日は叔父さんが来るから外で遊んでおいで、と言ったのに、聞かないんですよ」と言った。

辰馬はその様子に思わず吹き出した。

音輝は辰馬の姿を認めると、司の背にまつわりついたままにっこり笑って、

「あ、叔父ちゃん、いらつしゃい」と挨拶した。

辰馬もにっこり笑って、

「おう。元気そうだな。ケーキ買って来たから後で食いな」と言うのと、わーいと歓声を上げ、辰馬の足に抱きついて、「叔父ちゃん、ありがとう」と言った。その様子はあどけなくて、本当に可愛く、辰馬は思わずぐりぐりとそのおかつぱ頭を撫でた。

「音輝、叔父さんは私に話があるのだから、お母さんのところに行

つといで」

そう言つと、聞き分け良く、はいと言つて、ぱたぱたと部屋の外に出て行つた。

司はやれやれ、と苦笑いして着物の襟を正すと、辰馬に座布団を勧めた。

日本茶を運んで来た美月が、部屋から出たのを見計らつて、司が言つた。

「ニュースで拝見しましたよ。犯人捕まつたそうで、おめでとうございます」

そう言つて軽く会釈した。

辰馬は照れくさそうに頭を掻いて、

「いや、何もかもお前のおかげだ。ありがとうな、本当に」と言つた。

日本茶を一口飲んでから、辰馬は続けた。

「あの時な、お前が犯人が付けてたつて教えてくれたペンダント。あれが手がかりになつたのよ」

その言葉に日本茶を口にしながら司が反応する。

「あれな、あるインディーズのバンドのファンゲッズで、ファンクラブ会員しか持っていないやつだったわけよ」

それを聞くと、司はちよつと驚いた顔をした。

「あれ、三角形じゃなくてギターのピックの形なんだ。で、それに書かれていたのはバンド名と、その下に書いてあつたつて言う数字は会員番号だったのさ」

辰馬はそう言つてにやりと笑つた。

「お前がご丁寧にも書かれていた数字の一部まで覚えてくれてたから助かつたよ。ファンクラブに問い合わせせて、該当する数字の奴をピックアップして、後はお前の書いてくれた似顔絵と照らし合わせて身柄を確保。DNA鑑定が動かぬ証拠となつて、スピード逮捕つてわけだ」

そう言つと、嬉しそうにちよつとおどけて両手を広げて見せた。

司もにっこりと微笑って、

「それは何よりでした。犯人のDNAが手がかりとしてあったのは幸運でしたね」

辰馬は「ああ」と言うと、少し辛そうな顔をした。

「あの犯人のDNAが見つかったのは、さつきちゃんのおかげなんだ。殺されたとき、よっぽど苦しかったんだろうな――。犯人に抵抗して、引っかけ傷の一つも作ったんだろう。爪の中から犯人のDNAが検出されたのさ」

その言葉に司もしんみりとした顔で、そうですか、と言った。

同じ年頃の妹を持つ身として、心中やりきれないものがあるのだろう。

辰馬も、何とも言えずやりきれない気分を打ち消すように、日本茶をぐびりと飲み干した。

そんな重苦しい雰囲気壊すかのように、廊下からぱたと足音がして、音輝が満面の笑顔で顔を出した。

「ねえねえ。お母さんが、お話終わったなら皆でケーキ食べようって」

その無邪気な笑顔は、気まずい空気をあつという間に吹き飛ばした。

司は思わずぷつと吹き出すと、「わかった、すぐに行くから」と言った。

音輝が走り去ると、司は少し苦笑いして、行きましようか、と辰馬に言った。

辰馬も、思わずつられて笑った。

窓の外では、青葉が日の光を受けてきらきらと輝いている。

部屋の戸を開ければ、音輝の笑い声と、それをなだめる母親の声とが重なった。

ふと、音輝の笑い声が、聞いた事もないはずの、死んださつきの声と重なった。

あの娘も、今天国でああして笑っているのだろうか。

もう、恐怖におびえる事もないだろう。
そう思つと、辰馬はふと気が楽になり、にぎやかな笑い声の中へ
と足を踏み出した。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、たんのう堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n5745q/>

母と子の絆

2011年2月28日19時25分発行